フィンランド語の文語コーパスデータにみる “*saada* ‘get’ + 第３不定詞入格” 構文

千葉　庄寿（しょうじゅ） (博士課程 3 年)

言語学演習
発表日： 1999 年 6 月 28 日 (月) 第 3 時限

1　はじめに

フィンランド語学では、伝統的に **teettoverbi** と呼ばれる使役を表す特別な派生動詞形が認められており、その派生動詞が形成する構文は **kuratiivikausatiivi** と呼ばれている (Kytömäki 1978)。言語類型論において、使役構文のケースマーキングが論じられる際に (e.g. Comrie 1975)、フィンランド語の「使役構文」(causative construction) として引かれるのはこの構文である (例文 1a, 参考として、使役文に対応する使役を含まない文 (1b) を一緒に示す。例文のグロスの下に、使役に関与する項に一般的にあたえられる意味的な役割と構文内の文法関係との対応を、太字であらわしている) [1]：

(1)　a. *Minä*　*rakenn-**ut**-i-n*　*talo-n*　*muurare-i-lla.*
I.NOM　build-CAUS-IMP-1SG　house-ACC　bricklayer-PL-ADE
主語＝使役者　派生使役動詞　目的語　接格＝被使役者
「私は大工たちに家を建てさせた」(Comrie 1975:22)

b. 参考：　*Muurari-t*　*raken-si-vat*　*talo-n.*
bricklayer-NOM.PL　build-IMP-3PL　house-ACC
「大工たちが家を建てた」(*idem.* p.21)

例文 (1a) では、使役をおこなうもの (使役者, causer) と使役をうけて実際に行為をおこなうもの (被使役者, causee) とが、それぞれ主語と斜格名詞句であらわれている。派生使

[1] グロスは形態素をハイフン - で区切る。マーカーの顕在しない語形のもつ情報や、文法情報を複数含むいわゆる鞄型形態素のグロスは、ピリオド . に続けて表記している。表記の簡略化のため、複合語や派生接辞等の形態分析は、本論に差し障りのない限りにおいて省略することがある。グロスに用いる略号は以下の通り:

&＝列挙の小辞; 1,2,3＝人称; 1INF＝第 1 不定詞; 2INF＝第 2 不定詞; 3INF＝第 3 不定詞; ABL＝奪格; ACC＝対格; ADE＝接格; ALL＝向格; ANTAA＝ANTAA 型使役動詞; CAUS＝使役接尾辞; COMP＝比較級; COND＝条件法; ELA＝出格; ESS＝様格; GEN＝属格; ILL＝入格; IMP＝未完了過去; INE＝内格; MAPT＝動作主分詞; NOM＝主格; PAR＝分格; PASS＝受動; PL＝複数; PRES＝現在; PRPT＝現在分詞; PSPT＝過去分詞; PX＝所有接尾辞 (+人称,(数)); Q＝疑問の小辞; SG＝単数; SUP＝最上級; TRA＝変格; VNEG＝否定動詞

本文中、ことわりがない限り動詞は第 1 不定詞、名詞は主格の形で挙げる。また、例文は多少逐語的に訳し、もとの表現を保持するように試みている。

役動詞 *rakenn-utta-a* 'make build' は、主語の使役と被使役者の行う行為を複合的に表現している。

しかし、上述の使役構文 kuratiivikausatiivi (例文 1a) に加え、フィンランド語にはいくつかの「使役」を表していると考えられる構文がある。本発表では、主語 + 動詞 + 目的語 + 第 3 不定詞入格 というパターンをとる構文に注目する。例文 (2) は、最も典型的な動詞 *pan-na* 'put' を主動詞とするこの構文の例である (簡便を期して、以下このパターンをとる構文を **panna 型構文** と呼ぶ) :

(2) *Äiti* ***pan-i*** *poja-n* *pyytä-mä-än* *anteeksi.*
mother.NOM put-IMP.3SG boy-ACC ask-3INF-ILL sorry
「母親は少年を謝らせた」(*PS*, 見出し語 *panna* の項)

2 panna 型構文

例文 (2) では、母親が子供に許しを請わせる、という使役と考えられる状況が、主動詞 *pan-na* 'put' と、動詞の第 3 不定詞入格形 (動詞語幹 + 不定詞のマーカー *-ma/-mä* + 入格語尾 *-an/-än*) という、2 つの異なる動詞によって分析的に表現されている。そこで、panna 型構文の統語構造を、動詞の項構造に着目してまとめると、以下のようになる :

図 1 : panna 構文の項構造 (Vilkuna (1996: 273–4) にもとづく)

図が示すとおり、不定詞の主語に対応する項 (controller, 図 1 では 枠で囲んで 示している) は目的語である。不定詞の controller が主語でなく、目的語である統語構造は、panna 型構文に特徴的なもので、第 3 不定詞入格形が用いられる他の環境では、不定詞の controller となるのは常に主動詞の主語である。例えば第 3 不定詞入格形が自動詞と共起する場合 :

(3) ***Joudu-n*** *pitä-mä-än* *esitelmä-n.*
have to-1SG hold-3INF-ILL presentation-ACC
「私は発表をすることになる」(Penttilä 1963[2]: 405)

panna 型構文の統語構造はかなりしっかりしていて (Siro 1963: 107–8; Vilkuna 1996: 272–5)、項として目的語をとる主動詞と第 3 不定詞が共起する場合に、不定詞が (例文 (3) のように) 目的語でなく主語を controller とすることは許されない。

しかし、フィンランド語の伝統文法ではこのことはあまり重視されず、特に規範文法では第 3 不定詞入格は主動詞の他動性に関係なく一緒に扱われているのが普通である (cf. Siro 1964: 107–108)。フィンランド語の代表的かつ網羅的な規範文法のひとつである Penttilä

(1963[2]: 405) もその例に漏れないが、そこにはおよそ 70 の他動詞がリストされており、また最近出版されたフィンランド語の主要動詞の動詞価のリスト (Jönsson-Korhola & White 1997) では、第 3 不定詞をとる動詞として合計 42 個 [2] の動詞が例文とともに挙げられている。

一般に、第 3 不定詞入格をとることのできる動詞 (例文 2,3) の数はかなり多いと考えられている (Siro 1964: 108)。本発表で基礎資料として用いるフィンランドの週刊誌 *Suomen Kuvalehti* の 1987 年の記事全文を電子化したコーパス (総語数およそ 120 万語) [3] からは、全部で 1300 例ほどの panna 型構文の用例がえられ、構文の主要部としてあらわれた動詞は異なり語数で 180 種あり、この数は上述の 2 つの先行研究が挙げている数よりはるかに多い。

3 panna 型構文をとる動詞 *saa-da* 'get'

本発表では、動詞 *saa-da* 'get' を主動詞とする panna 型の構文に分析対象を限定し、その用例の吟味にもとづき panna 型構文を分析する際の基本的な問題点を考察する。*saada* は panna 型の構文形態をとる最も主要な動詞のひとつである。以下に、先行研究の挙げる *saada* を主動詞とする panna 型構文の例をいくつか示す：

(4) *Hän* *ei* ***saa-nut*** *minu-a* *valehtele-ma-an.*
(s)he.NOM VNEG.3SG get-PSPT I-PAR lie-3INF-ILL
「彼 (女) は私に嘘をつかせられなかった」(Setälä 1973[16] [1880]: 115)

(5) ***Sa-i-n*** *sinu-t* *ole-ma-an* *hilja-a.*
get-IMP-1SG you-ACC be-3INF-ILL silent-PAR
「わたしはあなたを静かにさせた」(Vilkuna 1996: 272)

(6) *Hän* ***sa-i*** *meidä-t* *suostu-ma-an.*
(s)he get-IMP.3SG we-ACC agree-3INF-ILL
「彼 (女) はわれわれを同意させた」(*idem.* p.275)

panna 型構文を使役構文として分析する際、2 つの問題が生じる。ひとつは panna 型構文を使役構文と名付けてよいのか、という疑問、もうひとつは panna 型の構文にあらわれる項の意味的な役割をどう考えるか、という問題である。

3.1 問題 1：panna 型構文と使役

panna 型の構文であれば、常に使役の意味をあらわすことができるのであろうか。panna 型をとる動詞の中には、以下の例文 (7 a) のように、「依頼」や「強制」(Setälä 1973[16] [1880]: 115) をあらわす動詞が含まれる：

[2] 松村一登教授にご提供いただいたデータに基づく。
[3] このコーパスからえられた例文には、sk-[ファイル番号]:[行番号] という形で出典を記載する。紙幅の都合上、正しく理解できる範囲で原文を簡略化することがある。

(7) a. *Minä* { ***käsk-i-n*** / ***pyy-si-n*** } *hän-tä* *luke-ma-an.*
I.NOM order-IMP-1SG ask-IMP-1SG (s)he-PAR read-3INF-ILL
「私は彼 (女) に本を読むよう { 命じた / 頼んだ } 」 (Setälä 1973[16] [1880]: 115)

b. *Minä* *käsk-i-n* *hän-tä* *luke-ma-an,* *mutta* *hän*
I.NOM order-IMP-1SG (s)he-PAR read-3INF-ILL but (s)he.NOM
ei *suostu-nut.*
VNEG.3SG agree-PSPT
「私は彼 (女) に本を読むよう命令じたが、彼 (女) は読もうとしなかった」 (作例)

b′. **Minä* ***sa-i-n*** *häne-t* *luke-ma-an,* *mutta* *hän*
I.NOM get-IMP-1SG (s)he-ACC read-3INF-ILL but he.NOM
ei *suostu-nut.*
VNEG.3SG agree-PSPT
「私は彼 (女) に本を読ませたが、彼 (女) は読もうとしなかった」 (作例)

ある構文を使役構文と認定する際に、使役の結果起こる行為が遂行されることが含意されることは重要な基準である (Shibatani 1976:2)。例文 (7b) からわかるように、「依頼」や「強制」をあらわす動詞の場合、使役の結果起こる行為は、必ずしも達成されている必要がない。これに対し、動詞 *saada* の場合には、主語である「私」のはたらきかけの結果として、「彼 (女) が読む」ということが実現したことが含意される (例文 7b′)。このことから、panna 型の構文形態をとる動詞のなかには、使役をあらわすとはいえないものもあることがわかる。

では、panna 型構文をとる動詞のなかで、動詞 *saa-da* 'get' (例文 4–6) は使役をあらわさない *käske-ä* 'order' (7a) などと、どのような点で異なるのだろうか。また、(もし *saada* を主動詞とする panna 型の構文を使役構文と呼べるとするならば) panna 型構文が使役構文として成立するための条件は、何なのだろうか。

3.2 問題 2：項としての使役者と被使役者

これまでみてきた panna 型構文の用例 (2, 4–6) は、多かれ少なかれ (1a) のような派生動詞を用いる使役構文 kuratiivikausatiivi に似ている。というのも、意味的に使役者と被使役者に対応するとおもわれる項が、それぞれ主語と目的語として構文中にあらわれているからである。kuratiivikausatiivi には、使役者が物理的ではないかたちで被使役者にはたらきかけ、その結果被使役者が (意思をもって) 何かをする、というように、使役と、その結果起こる行為との間に特定の結び付きが存在している。しかし、panna 型構文の場合、以下の例文 (8–10) が示すように、使役者から被使役者へのはたらきかけに特定のパターンをみつけることは、難しい。

(8) *Ahtaus* ***saa*** *sekä pyöräilijä-t että jalankulkija-t*
crowdness.NOM get.3SG both cyclist-PL.ACC and pedestrian-PL.ACC
tiuski-ma-an tois-i-lle-en.
snap-3INF-ILL each other-PL-ALL-PX3
「狭苦しさが自転車のりと歩行者を互いにかみつかせている」(*Suomen Kuvalehti* コーパス, sk-30:1353) [4]

(9) ***Saa-t-ko*** *aihee-sta-si synty-mä-än* *jotakin* *?*
get-2SG-Q subject-ELA-PX2SG be born-3INF-ILL something.PAR
「君は自分のテーマから何かを生み出せるか？」(Penttilä 1963[2]: 406)

(10) *Ei* ***saa-tu*** *kuorma-a käänty-mä-än.*
VNEG.3SG get-PASS.PSPT burden-PAR turn-3INF-ILL
「トラックは (道を) 曲がらなかった」(*ibid.*)

例文 (8) では、動詞 *saada* の主語として無生名詞が、逆に例文 (9, 10) では目的語に無生名詞があらわれている。無生名詞が主語、目的語 (つまり、使役者、被使役者) としてあらわれることは、フィンランド語の派生動詞を用いる使役構文 kuratiivikausatiivi (例文 1a) にはない。

上述の例文 (8–10) でも、使役者項 (主語) が被使役者項 (目的語) に何らかのかたちではたらきかけることにより、被使役者が何らかの出来事を実現させる、という図式が成り立っているように思えるかもしれない。しかし、実際には次のような例文がある：

(11) *show, joka* ***saa*** *Irangate-n* *unohtu-ma-an*
show which.NOM get.3SG Irangate-ACC be forgotten-3INF-ILL
「イランゲート事件が忘れられるようにさせる (政治的な) ショー」(sk-46:1918)

例文 (11) では、*saada* の主語にあたる対象のはたらきかけが、(直接的であれ間接的であれ) 目的語 *Irangate* には向けられてない。この場合、目的語の意味的役割を被使役者と分析し、使役によって何らかの行為が引き起こされると考えることは不可能である。

派生使役動詞をもちいる使役構文では、使役者、被使役者がともに項として構文中に存在することが、類型論上重要な一般化を可能にしている (Comrie 1975)。これに対し、Shibatani (1976: 1–2) は、使役構文を定義する基準として、使役があらわす状況を以下のようにまとめている (cf. Siro 1996: 130–1)：

1. 使役という出来事 causing event と、それにより引き起こされる出来事 caused event が別々に存在し、しかも前者が後者に先行していること
2. 使役により引き起こされる出来事が起こるかどうかが、完全に使役という出来事のあるなしによって決まること

この基準は、使役構文の構文特徴には全く触れておらず、従って、使役者、被使役者という意味的な役割が項としてあらわれる必要があるか、という問題は起こりえない。そして確かに、*saada* を主動詞とする panna 型構文はこの条件を満たす。しかし、ある種の文法

化を経て一定の構文形態を獲得している *saada* を主動詞とする panna 型構文のような構文について分析をおこなう場合、この構文が英語の *John melted ice.* における動詞 *melt* のような、意味的抽象的なレベルでのみ使役と判断できるような例と全く区別されないのは、構文記述の立場からは具合が悪い。

3.3 調査のねらい

本発表では *saada* を主動詞とする *panna* 型の構文の用法上の特徴を捉えるために、いくつかのパラメータを設定して実際にフィンランド語のコーパスから得られた用例データを分類調査する。分析のパラメーターとしてとりあげるのは、以下の 4 つである：

1. *saada* の目的語のあらわれかた (格形)
2. *saada* の目的語のあらわれかた (有生性)
3. 第 3 不定詞入格形であらわれる動詞の種類
4. *saada* の主語のあらわれかた (有生性)

今回使用したコーパスデータでは、*saada* を主動詞とする panna 型構文の用例は 330 例えられた。*saada* は panna 型構文をとってあらわれたなかで最も頻度が高い動詞である。

4 分析

4.1 目的語の格形

フィンランド語では、目的語は対格と分格の 2 つの格形をとることができる。*saada* を主動詞とする panna 型構文の用例の殆んどで、目的語は対格形であらわれている。

(12) *Ääni* *portaiko-ssa* ***sa-i*** *Anita-n* *käänty-mä-än.*
voice.NOM staircase-INE get-IMP.3SG Anita-ACC turn-3INF-ILL
「階段の声がアニタを振り向かせた」(sk-33:20)

(13) *mutta* *Jumala-n* *johdatus* ***sa-i*** *minu-t* *luopu-ma-an*
but god-GEN dispensation.NOM get-IMP.3SG I-ACC give up-3INF-ILL
koko *aikee-sta*
whole intention-ELA
「しかし、神の導きが私を全ての試みから退かせた」(sk-38:2547)

フィンランド語コーパスからは、僅かであるが分格目的語をとる用例もみつかる。しかし、これらの用例はすべて、目的語の指示対象の性質や、分格目的語を要求する環境から、なぜ分格で目的語があらわれているかを一般的に説明することができる (Vilkuna (1996: 118ff) に詳細な記述がある)。用例で最も多かったのは、否定動詞や、否定極性をもつ要素があるために分格目的語が要求される場合である (問題になっている箇所を 枠で囲んで 示す。)：

(14) *kuv-i-a* *on* *vaikea* ***saa-da*** *epäonnistu-ma-an*
picture-PL-PAR be.3SG difficult.NOM get-1INF fail-3INF-ILL
「絵を失敗させるのは難しい」(sk-20:1851)

(15) *ellei* *Sri Lanka-n* *sisällissota-a* ***saa-da*** *loppu-ma-an*
unless Sri Lanka-GEN civil war-PAR get-PASS end-3INF-ILL
「もし、スリランカの内戦を終わらせることができなければ」(sk-23:636)

従って、panna 型構文をとる動詞 *saada* は (他の制約がない限り) 対格形の名詞句を目的語にとるということができる。これは先行研究の指摘 (Vilkuna 1996: 272) とも一致する。

対格目的語をとる、という点で、*saada* はさきに見た「依頼」や「強制」をあらわす動詞 *käske-ä* 'order' (例文 7) とは大きく性質を異にする。後者の動詞は、通常分格目的語をとるのである。従って、目的語の格形は、panna 型構文をとる動詞を分類する重要なパラメータであると考えられる。

4.2 目的語の指示対象の有生性

panna 型構文をとる動詞 *saada* の目的語について、それが指示する対象の有生性に注目して用例を分類する。有生性の分類に際し、以下のような慣例をたてることにする：

- 集団や組織をあらわす名詞は有生名詞として扱う。

  例： *puolue* 'party'; *pankki* 'bank'; *lehti* 'magazine (press)'; *maa* 'country' etc.

- 生物の体の部分やその付属物 (e.g. *jalka* 'foot'; *sydän* 'heart' ; *silmä* 'eye')、また *sota* 'war' や *pommi* 'bomb', *tietokone* 'computer' のように、有生物 (人間) の補助なしに活動ができないものは、無生名詞として扱う。

上の基準で、多くの名詞は迷わずに分類することができた。

ただし、このような分類基準が本当に妥当であるかどうかは、議論の余地がある。例えば、場所をあらわす名詞 (e.g. *kaupunki* 'city'; *maatila* 'estate') がそこに住む人の集合をあらわすのか、その場所の指導者組織をあらわすのか、それとも単に場所をあらわすに過ぎないのかは、文脈によって判断しなければならなかった。

表 1： *saada* の目的語の有生性

目的語の種類	f	(%)
有生の目的語	203	(61.5%)
無生の目的語	109	(33.0%)
∅ 目的語	7	(2.1%)
不明または未確認	11	
合計	330	

分類の結果を表 1 に示した。表からわかるように、動詞 *saada* の目的語としては、有生名詞が比較的多く、全体のおよそ 2/3 を占めている。以下、有生無生目的語の例をそれぞれ示す。目的語の主要部名詞を 枠で囲んで いる。

4.2.1 目的語 = 有生

(16) *Ole-mme* ***saa-neet*** *kansa-n* *usko-ma-an,* *että* *muutos* *on*
be-1PL get-PSPT folk-ACC believe-3INF-ILL that change.NOM be.3SG
välttämätön.
unavoidable.NOM
「我々は国民に、変化が不可避であると信じさせることができた」(sk-05:87)

(17) *Sinä* *tarvitse-t* *jotakuta,* *joka* ***sa-isi*** *sinu-t*
you.NOM need-2SG someone.PAR who.NOM get-COND.3SG you-ACC
halua-ma-an *elä-ä* *tä-ssä* *maailma-ssa.*
want-3INF-ILL live-1INF this-INE world-INE
「君には誰か、君をこの世界で生きさせることができるような人が必要だ」
(sk-40:2197)

(18) *Kannustava* *opettaja* ***saa*** *heidä-t* *innostu-ma-an.*
stimulating teacher.NOM get.3SG they.ACC be enthusiastic-3INF-ILL
「刺激的な教師は彼らを熱中させる」(sk-09:2286)

(19) *Tapa-n* *kärpäs-i-ä,* *mutten* *saa* *nii-tä* *loppu-ma-an.*
kill-1SG fly-PL-PAR but.VNEG.1SG get.3SG they-PAR end-3INF-ILL
「ハエを殺しても、いなくならない」(Penttilä 1963[2]: 406)

4.2.2 目的語 = 無生

(20) *Rocklaboratorio-n* *kaltaise-t* *järjestö-t* *o-vat*
Rock Laboratory-GEN -wise-PL.NOM organization-PL.NOM be-3PL
saa-neet *muuttu-ma-an* *bänd-ien* *keikkapalkkiokäytännö-n*
get-PSPT.PL change-3INF-ILL band-PL.GEN tour wage convention-ACC
Neuvostoliito-ssa.
Soviet-INE
「ロック・ラボラトリーのような団体が、ソビエトでのバンドのツアー出演料の慣例を変化させている」(sk-46:1999)

(21) ***Sa-i-n*** *tä-ltä* *suomalaisnaise-lta* *pelo-t* *katoa-ma-an*
get-IMP-1SG this-ABL Finn-ABL fear-PL.ACC disappear-3INF-ILL
kolmante-na *päivä-nä.*
third-ESS day-ESS
「わたしは 3 日めにしてこのフィンランド人女性から恐怖をなくさせることができた」(sk-44:1577)

4.2.3 ∅ 目的語

被使役者にあたる目的語が表層にあらわれていない場合がある。この場合、指示対象として常に不特定の人間が含意される (Vilkuna 1996: 274–5)。目的語が表層にあらわれない場合でも、動詞 *saa-da* が他動詞と判断できるため、不定詞が主語を controller にとるとは解釈されない。

(22) *Vanha esineistö* ***saa*** ∅ *kunnioitta-ma-an taito-ja,*
old furniture.NOM get.3SG (目的語) praise-3INF-ILL skill-PL.PAR
jotka o-vat katoamise-n kynnykse-llä.
which.PL.NOM be-3PL extinction-GEN threshold-ADE
「古い道具は、消えゆく技を賞賛させる」(sk-37:2421)

(23) *Uusi suunnittelu* ***saa*** ∅ *usko-ma-an, että puu otta-a*
new planning.NOM get.3SG (目的語) believe-3INF-ILL that tree take-3SG
uus-i-a muoto-ja, sopeutu-u aja-n ja tekniika-n
new-PL-PAR form-PL.PAR, adapt oneself-3SG time-GEN and technique-GEN
muutoks-i-in.
change-PL-ILL
「新しい案は、(材料として) 木が新しい形をとり、時間と技術の変化に対応することを信じさせる」(sk-37:2422)

興味深いことに、∅ 目的語があらわれるフィンランド語コーパスの用例で、*saada* の主語は常に無生名詞であった。

4.3 第 3 不定詞入格形であらわれる動詞の種類

saada を主動詞とする panna 型構文の第 3 不定詞入格形であらわれる動詞には、主語を動詞の項として要求する動詞であれば自動詞でも他動詞でも来ることができる。

- 不定詞として自動詞がくる場合 (例文 11 も参照)

(24) *ei tiede-tä minkä kokoinen kuvio* ***saa-daan***
VNEG.3SG know-PASS what.GEN of size figure.ACC get-PASS
synty-mä-än
be born-3INF-ILL
「どんな大きさの像が生まれるようにされられるかはわからない」(sk-45.snt:905)

(25) *Hän* ***sa-i*** *silmä-ni* *avautu-ma-an* *oma-lle*
(s)he.NOM get-IMP.3SG eye-PL.ACC.PX1SG be opened-3INF-ILL own-ALL
ominaislaadu-lle-ni.
original quality-ALL-PX1SG
「彼 (女) は私の眼が私自身の個性へと開くようにさせた」(sk-41:2218)

- 不定詞として他動詞がくる場合

(26) *Reini-n* *myrkkypäästö* ***sa-i*** *häne-t* *kirjoitta-ma-an*
Rein-GEN noxious emission.NOM get-IMP.3SG (s)he-ACC write-3INF-ILL
runo-n.
poem-ACC
「Rein の毒物排出は彼 (女) に詩を書かせた」(sk-47:1354)

しかし、実際にあらわれる動詞の種類にはかたよりがみられる。ここでは動詞の他動性について検討することにする。*saada* を主動詞とする場合、第 3 不定詞入格であらわれた動詞に自動詞が多いのが特徴である。

表 2： 動詞 *saa-da* のとる第 3 不定詞の種類

出現頻度	異なり	のべ
自動詞	149	236
他動詞	64	83
(+ 不定詞, 節, 分詞構文)	14	28
合計	227	347[α]

[α] 第 3 不定詞入格形が複数連続する例があるため、用例の総数よりも不定詞の総数の方が多くなっている。

この分布は、*saada* を主動詞とする構文に特徴的なものなのであろうか。実際には、構文の主動詞によって動詞の種類別の分布は異なるようである。参考までに、*pan-na* 'put' を主動詞とする panna 型構文の用例についての同様の分類結果を以下に示す：

表 3： 動詞 *pan-na* のとる第 3 不定詞の種類

出現頻度	異なり	のべ
自動詞	32	38
他動詞	33	39
(+ 節)	9	12
その他	1	1
合計	75	90

従って、このパラメータは、*saada* を主動詞とする panna 型構文の特徴を示すものとおもわれる。他の panna 型構文、ならびに動詞の出現頻度の一般的な傾向とも比較しつつ、分析をすすめたい。

4.4 ***saada*** の主語の有生性

saada の主語としてあらわれる名詞句の指示対象を、有生性についてまとめると、以下のようになる。分類は §4.2 で示した慣例に従っている。

表 4： *saada* の主語の有生性

主語の有生性	条件	f	(%)	小計 (%)
1. 有生の主語	a. 主語が顕在	79	(23.9%)	173 (52.4%)
	b. 受け身文	68	(20.6%)	
	c. 総称文	26	(7.9%)	
2. 無生の主語		101		(30.6%)
3. 主語なし (不定詞など)		41		(12.4%)
4. 不明または未確認		13		(3.9%)
合計		330		

panna 型構文が用いられる環境により主語の出現可能性が変化するため、全体像が把握しづらいが、もし、主語が出現しうる環境 (1. と 2.) のみに例文を限れば、該当用例中有生の主語は 63.1%、無生主語は 36.9% あらわれていることになる。

4.4.1 主語 = 有生

概出の用例 (16–21) を参照。

以下の例文にみられるように、*saada* が受け身形であらわれる場合 (例文 27–28) や、また主語なしの 3 人称単数形で総称的に用いられる場合 (29) でも、使役者として人間が常に含意される。全用例中、前者は 68 例、後者は 26 例あった。主語が顕在的にあらわれない受動文と総称文の例を除くと、有生名詞が主語として用いられるケースは 79 例あった。

(27) *miten siellä on kameli-t-kin **saa-tu** hyvin*
how there be.3SG camel-PL.ACC-Q get-PASS.PSPT well
viihty-mä-än ja lisäänty-mä-än
feel happy-3INF-ILL and multiply-3INF-ILL
「どうしてそこでラクダたちを安心して暮らさせ、増えさせることができるのか」(sk-37:611)

(28) *Hanke **saa-tiin** valitusteitse kaatu-ma-an.*
plan.ACC get-PASS.IMP bu way of appeal fall down-3INF-ILL
「計画は批判が相次ぎ挫折させられた」(sk-33:795)

(29) *konee-n ääre-ssä **saa** aja-n pysähty-mä-än*
machine-GEN edge-INE get-3SG time-ACC stop-3INF-ILL
「この機械のそばでは (人は) 時間を止まらせることができる」(sk-40:1653)

4.4.2 主語 = 無生

動詞 *saada* の主語として無生名詞があらわれる例を以下に示す (主語の主要部名詞を 枠で囲む)：

(30) *kaasu-jen* *pelko* ***sa-i*** *miehe-t* *peräänty-mä-än*
gas-PL.GEN fear.NOM get-IMP.3SG man-PL.ACC retreat-3INF-ILL
「ガスの恐怖が人々を避難させた」(sk-20:765)

(31) *Mainonta* ***saa*** *ihmise-t* *halua-ma-an* *tuote-tta.*
advertising get.3SG people-PL.ACC want-3INF-ILL product-PAR
「広告は人々に製品を買わせるようにする」(sk-23:1901)

(32) *nii-hin* [= *tälla-i-siin* *vuosiluvu-i-hin*] *tuijottaminen* ***saa***
they-ILL such-PL-ILL year-PL-ILL close look.NOM get.3SG
menneisyy-den *näyttä-mä-än* *vain* *lyhye-mmä-ltä* *kuin* *mi-hin*
past-ACC look-3INF-ILL only short-COMP-ABL than what-ILL
varmuude-lla *ol-isi* *aihe-tta.*
certainty-ADE be-COND.3SG reason-PAR
「(このような年) をじっと見ることは、過去を、そうあるはずのものよりずっと短いものに見えさせる」(sk-28:1760)

(33) *Järistykse-t* ***sa-i-vat*** *talo-t* *vapise-ma-an.*
tremor-PL.NOM get-IMP-3PL house-PL.ACC shake-3INF-ILL
「振動は家々を震えさせた」(sk-29:845)

動詞 *saada* の主語としてあらわれる無生名詞には、ものとして実世界に存在するものが少なく、特にその中で加算名詞と解釈できるものは殆んどない。むしろ、今回調べた限りでは、抽象名詞や直前の陳述全体をうける代名詞 *se* 'it' や *mikä* 'what'、また動作をあらわす名詞が多くみられる。

興味深いのは、無生の主語と共起する目的語の指示対象の殆どが人間であることである。現時点で確認できている限りでは、無生主語と有生目的語が共起している用例は (不特定の人間をあらわす ∅ 目的語 (例文 22–23) を含めて) 77 例 (76.2%) である。(これに対し、受け身文 (全 68 例) に有生目的語があらわれる比率は半分以下 (31 例) と低い。):

(34) *Nuor-ten* *poliittinen* *passiivisuus* *on* ***saa-nut*** *puoluee-t*
young-PL.GEN political passiveness.NOM be.3SG get-PSPT party-PL.ACC
kokeile-ma-an *mi-tä* *mielikuvituksellisi-mp-i-a* *houkuttim-i-a*
experiment-3INF-ILL what-PAR imaginative-SUP-PL-PAR lure-PL-PAR
näi-den *saamise-ksi* *uurn-i-lle.*
these-GEN getting-TRA box-PL-ALL
「若者の政治的消極性は、彼らの票を得るため、政党にあの手この手の作戦を試みさせている」(sk-08:1438)

(6) *Ahtaus* ***saa*** *sekä* *pyöräilijä-t* *että* *jalankulkija-t*
crowdedness.NOM get.3SG both cyclist-PL.ACC and pedestrian-PL.ACC
tiuski-ma-an *tois-i-lle-en* .
snap-3INF-ILL each other-PL-ALL-PX3

「狭苦しさが自転車のりと歩行者を互いにかみつかせている」(再出, sk-30:1353)

動詞 *saada* に関し、実際にこのような無生名詞が主語としてあらわれた例は 101 例、全用例中の 3 割強を占める。この頻度をどのように解釈するかは、議論の余地があるが、他の panna 型構文の主動詞との比較を待ちたい。

5 まとめと今後の展望

これまでの分析によって、panna 型構文をとる動詞 *saada* について以下のことが明らかになった：

1. *saada* は、目的語に対格名詞句を要求する。
2. *saada* の主語、目的語としてあらわれる名詞には、有生名詞が多い。
3. *saada* と共起する第 3 不定詞には、自動詞があらわれることが多い。

今後、えられたデータについて、パラメーターごとの詳しい相関を調べることで、*saada* をもちいた panna 型構文が用いられる主要なパターンを明らかにし、同一の構文形態をとる他の動詞の用例との比較対照をつうじ、動詞 *saada* の用法全体を記述するための足がかりにしたいと考えている。

A 参考文献

Comrie, Bernard 1975 "Causatives and universal grammar" *Transactions of the Philological Society* 1974: 1–32.

Hakulinen, Auli and Fred Karlsson 1979 *Nykysuomen lauseoppia.* Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Jönsson-Korhola, Hannele & Leila White 1997 *Tarkista tästä.* Helsinki: Edita.

Kemmer, Suzanne & Arie Verhagen 1994 "The grammar of causatives and the conceptual structure of events" *Cognitive Linguistics* 5: 115–156.

Kytömäki, Leena 1978 "Kuratiivikausatiivi" In Alhoniemi, Alho (ed.) *Rakenteita: Juhlakirja Osmo Ikolan 60-vuotispäiväksi.* Turku: Turun yliopiston Suomalaisen ja yleisen kielitieteen laitos. pp. 129-150.

Penttilä, Aarni 1963[2] *Suomen kielioppi.* Porvoo, Finland: Werner Söderström.

PS = Haarala, Risto (Editor in Chief) 1990–1994 *Suomen kielen perussanakirja.* Helsinki: Kotimaisten kielten tutkimuskeskus.

Setälä, E. N. 1973[16] [1880] *Suomen kielen lauseoppi.* (editted by Sadeniemi, Matti) Helsinki: Otava.

Shibatani, Masayoshi 1976 "The grammar of causative constructions: A conspectus" In Shibatani, Masayoshi (ed.) *The Grammar of Causative Constructions.* Syntax and Semantics 6. New York: Academic Press. pp.1–40.

Siro, Paavo 1963 *Suomen kielen lauseoppi.* Helsinki: Tietosanakirja.

Siro, Paavo 1996 [1978] "Kausatiivien kielioppia" Helsinki: Helsingin yliopiston suomen kielen laitos. pp. 129–196.

Vesikansa, Jouko 1978 *Johdokset.* (Nykysuomen Oppaita 2.) Porvoo: Werner Söderström.

Vilkuna, Maria 1996 *Suomen lauseopin perusteet.* Helsinki: Edita.